

朝日の *Asahi Welfare Letter* 社会福祉だより

Spring 2026



朝日新聞厚生文化事業団のHPでもさまざまなお知らせを発信しております。アクセスは右のQRコードからどうぞ

発行 朝日新聞厚生文化事業団 〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
電話 03-5540-7446 ホームページ <https://www.asahi-welfare.or.jp/>

文化と福祉 つなぎ続けて1世紀

事業団のチャリティー事業

朝日新聞厚生文化事業団は、1928（昭和3）年に設立されました*。

特徴の一つは、音楽、演劇、美術展、映画上映などに使われ、当時の大阪の文化に大きく貢献した「大阪朝日会館」（フェスティバルホールの前身）を運営し、その収入を活動資金にあてたことです。福祉と文化の接点となってきた伝統は、今もチャリティー事業として受け継がれています。

*当時は「社団法人 朝日新聞社会事業団」

朝日チャリティー色紙展

朝日新聞社が1925（大正14）年に関東大震災の被災者や困窮者支援のために、作家や歌人、俳優らの協力を仰いで開いた色紙短冊や署名入り写真の即売会をルーツに持つ催しです。初回の出品者には芥川龍之介、与謝野晶子、竹久夢二ら当時の有名人が名を連ねています。コロナ禍を機にオンライン開催となり、2026年は2月3日～16

日に実施。各界の著名人や漫画家、イラストレーターの方々から「子どもたちが安心して暮らすことのできる世界になりますように」「皆の未来を応援します！」など温かいメッセージとともに110点が寄せられ、全国から1444件の入札がありました。

チャリティーコンサート「メサイア」

演目の「メサイア」は、作曲したG・F・ヘンデル（1685～1759）が慈善目的の演奏を繰り返してきた曲で、その精神にならおうと、震災孤児の窮状に心を痛めていた音楽家たちの協力で1951年に始まりました。東京藝術大学音楽学部声楽科の1～3年生約160人が担う合唱は迫力十分。「藝大メサイア」の愛称でファンも多い、宗教的な背景を持たない大学が社会貢献を目的に新聞社とともに続けてきたユニークな公演です。



東京文化会館大ホールで行われた第75回公演。約2050人が来場し、情熱的な演奏に終演後は拍手が鳴りやまなかった（2025年12月23日）

親子で楽しむクリスマスコンサート



新沢としひこさん、ケロボンズらをゲストに迎え、有楽町朝日ホールで開かれた「親子で楽しむクリスマスコンサートFINAL」（25年12月21日）

「世界中のこどもたちが」「にじ」など多くの曲を生み出してきた、シンガーソングライターの中川ひろたかさんが率いる音楽事務所ソングブックカフェの協力で、毎年12月に東京・有楽町朝日ホールで開かれてきました。あそびうたや絵本の朗読、ダンスなど全身を動かして楽しめるプログラムで、大人も子どもも笑顔になれるコンサートです。2001年に始まり、25年の公演をもって終了となりました。参加者から「素敵な時間でした。それに加え、能登や東日本、熊本等、何か出来ないかと思いつつも出来ずにいましたが、（中川さんから収益の一部が被災地支援になると聞き）その思いも叶えていただき感謝です」という声も寄せられました。

事業のご報告

能登半島の被災地支援

(12月21日、22日 石川県穴水町)

事業団では、被災地でボランティア活動を行う大学生を資金面等で支援しています。その一環で、高崎健康福祉大学(群馬県高崎市)のMAGIC CLUBの学生5人がボランティアとして石川県穴水町の下唐川地区集会所、児童養護施設「あすなろ学園」「平和こども園」などを訪れ、マジックと大道芸を披露しました。各地で温かく迎えていただき、さまざまな世代のみなさんと親睦を深めました。



地区の集会所で大道芸を披露する大学生たち

自殺予防公開講座(1月30日、福岡市)

父の自死を経験し、音楽活動のかたわら経済的に苦しい思いをしている国内外の若者を受け入れて暮らす活動を続けてきたシンガー・ソングライター玉城ちはるさんを講師に迎えました。異なる価値観の中で衝突を重ね「足りなかったのは対話」と気づいた経験を紹介し、他者を理解するには対話が不可欠と強調しました。悩みを抱える子どもたちには思いを言葉にする「相談力」が必要だと訴え、自作曲の披露も含め約150人が耳を傾けました。



「子どもたちは悩みを抱えていても周囲にすぐ相談できない」と指摘する玉城さん(左)

にもにもフェス(12月6日、大阪府高槻市)

障害の有無を問わず誰もが自分らしく暮らせる地域を、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」(にも包括)を切り口に考えることを目的に、高槻市の有志と共催して開催しました。参加者の声を集めて理想の街を描くアート制作、映画上映とトーク、福祉マルシェなど4会場で多彩な企画を実施し、約400人が参加しました。多世代が自然に交流する場となり、地域の未来を共に思い描く機会となりました。



映画「生きて、生きて、生きる」上映後に行った、各地で精力的に実践を積み重ねるゲストによるトークセッション

イベントカレンダー

4月1日(水) 未来まなび応援金(26年度4～9月給付分)受け付け開始

6月28日(日) セミナー 障がい児・医療的ケア児の親と就労(オンライン)



キャンパスライフ

4年制大学 建築工学科3年生

「なんとなく」を卒業し、自分の判断に根拠を求めるようになった。設計・プレゼン・筋トレといった一見バラバラな活動の中で、共通してなぜその選択をするのか?という問いを自分に突きつける場面が増えた。特に建築設計において、カッコいい形を追い求めていただけだったが、水族館や海の駅、ホテルの提案を通じて、空間を物ではなく人の体験の連なりとして捉える感覚が芽生えた。

4年制大学 福祉社会学部1年生

日々の授業に真剣に取り組み、課題や試験に向けて計画的に学習を進めています。学業と並行してアルバイトにも取り組み、時間管理や責任感を身につけるよう努めています。また、バドミントン部に入学し体力づくりや仲間との交流を通して心身のリフレッシュを図っています。さらに、二年生からの一人暮らしに向けて計画的に貯金を行い、自立した生活への準備も進めています。

